『きれいな輪』

三年　永山よしの

私の思う介護は、たくさんの人で創り上げた「きれいな輪」だ。欠けていても、形が汚くても、介護は成り立たない。これが私の考える介護という名の支援だ。

私は介護福祉士を目指している。きっかけは、小学校六年生の時、母方の祖母が脳卒中で倒れたことだ。しゃべることも、歩くこともできなくなった姿を見て、驚きで何もしてあげることができなかった。それから、少しでも介護について勉強したいと思い、高校に入って介護職員初任者研修を受けた。介護について基礎から学ぶことは、今回が初めてだった。介護は利用者さんの身のまわりのこと全てを手助けするのだと思っていた。だが、その考えは間違っているのだと研修を受けて知った。

まず学んだのは、何でも手助けするのではなく、利用者さんができることは自身でやってもらう、自立支援が大切だということだ。そうすることで状態の悪化を防ぐことにつながる。服などを決める自己決定や、自己選択も自立支援の一つだ。介護職は、これらを利用者さんの尊厳を守った上で行っている。常に利用者さんの立場に立って考えながら支援をするので、利用者さんの負担を軽減することができる。そのためには、私の考える介護「きれいな輪」の基礎となる、利用者さん自身や、家族の話をしっかりと聞くことが大切だ。職員が話を聞くことができなければ、必要な情報が得られない。そうすると、利用者さんは不快な思いをするだろう。最悪の場合、状態を悪化させることにもつながる。介護は、契約を結び、施設に入所してからが始まりではない。話を聞く時点で介護という名の支援は始まっているのだ。家族は、職員を頼って話に来てくれる。話を聞かないと支援を始めることもできない。さらには、利用者さんや、家族が大変な日々を送ることになる。介護は、利用者さんだけでなく、家族のための支援でもあるのだ。そして、利用者さんを支援するのは介護職だけでない。医療関係者やリハビリテーション職などさまざまな人が関わる必要がある。多職種間での連携や情報共有ができなければ、より良い支援は提供できないのだ。

私が将来介護福祉士になったら、しっかりと利用者さんや家族の話を聞いて、それぞれの利用者さんに合う支援を提供したい。私自身、祖母に寄りそうことができず後悔している。だから、後悔してしまう家族が増えないよう、私は、利用者さんにも、家族にも寄りそえる介護福祉士を目指している。